

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 11 日現在

機関番号：34427

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02060

研究課題名(和文)「従軍慰安婦」表象とジェンダーの政治学：東アジアの文化空間を横断する記憶と戦争

研究課題名(英文) Representation of Japanese military "Comfort Woman" and Gender politics in East Asia

研究代表者

李 惠慶 (LEE, HYEKYOUNG)

大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：20648737

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は戦後の東アジアの文化空間における日本軍慰安婦の表象をジェンダー・ナショナリズムの力学から比較分析し、その政治的無意識を明らかにするものであった。そのため日本・韓国・台湾(中国)の様々な文化生産物を、東アジアの慰安婦表象史、慰安婦表象と被害者ナショナリズムをめぐる政治的・社会的・文化的・歴史的諸条項の比較、慰安婦をめぐる文化的記憶と国民統合装置、国家身体としての慰安婦＝女性身体をめぐる記憶/忘却/癒しのポリティックスの4つの切り口から読み直し、慰安婦表象とナショナリズムとのダイナミックな関係や、傷ついた男たちの再男性化のプロセス及び二重にねじられた帝国主義的欲望等をあぶり出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はこれまでの日本軍慰安婦をめぐる表象研究を批判的に継承しつつ、社会科学分野を中心に個別に論じられがちな慰安婦問題を、東アジアの文化空間における文化的記憶から再考したものである。特に時間的・空間的・文化的な連続性と断絶性が複雑に交錯する日本・韓国・台湾(中国)をポストコロニアル・トライアングルとして繋ぎ、日本軍慰安婦表象を通時的かつ共時的に分析することにより、東アジアの戦争とジェンダーの表象研究をめぐる総合的な比較研究の基盤を構築することができた。今後のジェンダー研究の他、表象文化研究・地域研究・比較文学などへの幅広い応用はむしろ、東アジア諸国と日本の相互理解への一助になると思われる。

研究成果の概要(英文)：After World War II, How Comfort Woman have been portrayed in Japanese, Korean, Chinese popular Cultural products? And how large a role did their representation play in strengthened and reproducing national identity and memory? This study was to clarify that the political unconscious on trivialization, generalization, and semanticization in the comfort women issue. Therefore, I have analyzed from the following four items: A brief history of representation of the Comfort women in East Asia, Political unconscious and Cultural logic on Comfort Women narrative, Victimhood Nationalism and Gender in contested memories, and Politics of memory and Restoration of Masculinity in historical trauma. In concluding, Representation of comfort women contained male dominion and patriarchal ideology which enforced gender roles and expectations for the females in their respective societies, so that means increasingly close relationship between reconstruction of Gender, Politics and History.

研究分野：地域研究、ジェンダー、比較文化

キーワード：日本軍慰安婦 ジェンダー表象 記憶のポリティックス 帝国主義 ナショナリズム 傷ついた男性性 再男性化 少女の神格化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在、日本と韓国は「歴史戦争」の真っ只中にある。歴史認識をめぐる相違が年々顕著となり、摩擦と衝突が絶えず、それに伴った急激な国民感情の悪化と相互不信の連鎖は「歴史戦争」をさらに複雑にさせている。こうした両国の「戦い」の中心に据えられているのが日本軍慰安婦問題であるのはいままでのない。

長い間、東アジアの文化空間において慰安婦が取り上げられることはほとんどなく、特に韓国と中国では禁忌とされてきた。だが近年、その状況は一変し、慰安婦を主題化した文化生産物があらゆるジャンルから量産され消費されている。なかでも映画や漫画、ドキュメンタリー、アニメーションなどの視覚文化領域での動きが目立ち（『最後の慰安婦』『少女の物語』『終わらない話』『The Last Tear』『22』『帰郷』（韓）や、『太陽が欲しい』『黎明之眼』（中）、『葦の歌』（台）など）、その発信力と社会的影響力は東アジアの慰安婦をめぐる歴史戦争をアメリカ化＝世界化させながら、これまでにない困難かつ複雑な状況を生み出している（例：アメリカに建てられた「慰安婦像」（＝「少女像」）や日本軍慰安婦関連資料の世界記録遺産への登録申請（中・韓）、ドキュメンタリー映画『スコッツボロガールズ（Scottsboro Girls）』の上映（日）による摩擦と対立など）。

こうした現状から、戦後日本軍慰安婦がどのように想起・表象され、今日の被害者意識に貫かれたナショナリズムと結びつけられてきたのか、そしてそこにどういった問題が内在しているのか、より立体的で多角的な検討が求められた。その意味では慰安婦表象を含む女性身体表象について論じられた『アジアの女性身体はいかに描かれたか』（北原恵、青弓社、2013年）は示唆的である。しかしながら多くの論考が戦中もしくは戦後直後に光を当てたもので、今日に続く展開についてはほとんど考慮されておらず、また旧植民地の男性による慰安婦や女性身体へのまなざしが見落とされているなど、いくつか検討すべき問題を残していた。

そのため、本研究では「日本の戦争犯罪のアジアン/アメリカ化」（米山リサ、『暴力・戦争・リドレス 多文化主義のポリティクス』、岩波書店、2003年）と、「感情記憶」（孫歌、『アジアを語ることのジレンマ』、岩波書店、2002年）を批判的に継承しながら、日本・韓国・台湾（中国）の日本軍慰安婦表象におけるジェンダーとナショナリズムの力学と政治的無意識とを、様々な文化生産物から比較分析することにした。

2. 研究の目的

戦後、東アジアの文化空間において日本軍慰安婦はどのようにまなざされ表象され想起されてきたのか。そしてそこにはどういった政治的無意識が働いているのか。日本・韓国・台湾（中国）の「慰安婦」表象におけるジェンダー・ナショナリズムの力学と政治的無意識とを、様々な文化的生産物における文化的記憶から比較分析し、ひいては東アジア諸国と日本の間の相互理解増進の一助とすることが本研究の主な目的であった。そのため、本研究では東アジアの「慰安婦」表象史、「慰安婦」表象と被害者意識・ナショナリズムの形成と変容をめぐる政治的・社会的・文化的・歴史的諸条項の比較、「慰安婦」をめぐる文化的記憶と国民統合装置としての働き、女性＝国家身体表象による記憶/忘却/癒しのポリティックス、の4つの切り口から分析を行った。

3. 研究の方法

先述のように、本研究は日本・韓国・台湾（中国）の文化空間における日本軍慰安婦の表象について多角的、総合的、比較論的分析を行い、ジェンダーとナショナリズムの力学と被害者意識との結びつき、そしてそこに内在する政治的無意識を明らかにしようとしたものである。そのため、本研究では東アジアの文学・映画・漫画・ドキュメンタリー・ドラマ・戦争関連モノキュメント/メモリアルといった様々な文化生産物を分析対象とし、テキスト分析を重ねた。その際、以下の3つを中心軸に据え、横断領域的に分析を進めた。

1) 日本軍慰安婦イメージと文化的記憶の（再-）構築や変容の諸相の比較分析

詳細なテキスト分析を通じて東アジアの「従軍慰安婦」イメージと文化的記憶の（再-）構築や変容の諸相を政治・社会・文化・歴史的諸条項から比較検討した。

日本・韓国・台湾（中国）の日本軍慰安婦像の比較

日本軍慰安婦は戦時から現在に至るまでの暴力の継続を示す象徴的存在であり、彼女らをめぐる問題は今現代も解決の兆しが見えず、東アジア諸国の政治的根幹を揺るがす大きな問題であり続けている。しかし彼女らのイメージや文化的記憶は必ずしも一致するものではなく、時代によってもまたそれぞれの国の政治的状況や特異性によっても異なる。そのため、日本軍慰安婦がそれぞれの国でどのようにまなざされ描かれ、そしてそれが国民の感情記憶にどう影響しているのか、その共通点と相違点を析出した。

日本軍慰安婦をめぐる象徴的記憶におけるロジック

文化記憶における慰安婦のイメージや表象は個人の身体レベルから共同体や国のレベルまで様々な形で具象化され、最終的には国民的感情記憶を作り上げる。そのため、彼女らの描かれ方や物語におけるロジックをそれぞれのコンテキストの特異性から比較分析し、対抗政治の可能性を問うた。

2) 被害者意識・ナショナリズムの(再-)構築・強化のプロセス

歴史的トラウマをめぐる記憶と忘却の問題は、国民的アイデンティティの(再-)構築・強化と不可分である。本研究項目では近年、数多く建てられた日本軍慰安婦像(いわゆる「少女像」)や戦争関連モニュメントをも分析対象に入れ、ジェンダーとナショナリズムの力学とその政治的無意識を多角的に検討した。

日本軍慰安婦表象と被害者意識・ナショナリズムの相関関係

日本軍慰安婦は日本帝国の暴力を暴く歴史の生き証人である。だが、その一方で旧植民地の男性にとっては自分らを絶対的被害者として位置づけてくれる確固たる存在でもある。こうした旧植民地の男らの被害者性を際立たせるための国家・民族の女性身体への投影は看過できない問題である。そのため、慰安婦表象における被害者意識がどのようなロジックによって構築され、さらに強化されていったのか、それに関して東アジア諸国の違いはあるのか、本項目では特にジェンダー表象における身体的・社会的配置の相互作用に光を当ててテキストを詳細に読んだ。

日本軍慰安婦の語りの構造分析による自己表象及び自己肯定/否定の仕方

日本軍慰安婦たちは自己をどのように語り、どのように表象してきたのか。ドキュメンタリー映画や自伝などから彼女らの語りの構造を分析し、自分をどのように意味づけているのかを調べた。また、彼女らの物語が戦争の悲惨さを訴えながらも最終的にはナショナルな自己肯定の物語へ収斂されていくものと何がどう違うのかを考察した。

3) 日本軍慰安婦表象における政治的無意識

慰安婦関連文化生産物における記憶/忘却/癒しのポリティックス

ルナンの国民の定義から明らかなように、記憶はナショナルな主体形成の条件であり、何を記憶し、何を忘却するかという問題は集合的記憶と不可分である。その意味では日本軍慰安婦表象において何が想起され、何が忘却されているのか、そこにどういった政治的無意識が働いているのかを検証するのは重要な問題であり続ける。本研究ではそれを癒しのポリティックスという観点から分析した。

アジア系アメリカ文学における日本軍慰安婦とナショナリズム

近年、アメリカではアジア系アメリカ人作家らによる歴史の問い直しが目立っており、その中心にいるのが韓国系である。彼/彼女らの多くの作品には日本の植民地支配の暴力とその悲劇が主題化されており、日本軍慰安婦を描いたものも少なくない。しかも最近の慰安婦を中心とした東アジアの歴史認識をめぐる「戦い」の場がアメリカに移りつつある状況を鑑みて、本研究ではかれらのテキストにおける日本軍慰安婦表象を遠距離ナショナリズムから読み直し、その社会的政治的影響を探った。

4. 研究成果

上記の研究目的と研究方法に基づき、本研究では日本・韓国・台湾(中国)の文化空間における日本軍慰安婦の表象について総合的、かつ立体的な比較分析を行った。とりわけ、東アジアの「慰安婦」表象史、「慰安婦」表象と被害者意識・ナショナリズムの形成と変容をめぐる比較研究、「慰安婦」をめぐる文化的記憶と国民統合装置としての働き、女性=国家身体表象による記憶/忘却/癒しのポリティックス、の4つの項目から分析を重ねた本研究では、日本軍慰安婦表象におけるジェンダーとナショナリズムの力学に関する様々な成果を得ることができた。紙面の制約上、ここでは主なものを略述しておくことにする。

慰安婦を主題化した映画で彼女らの身体がいかに男性中心的な眼差しから性的客体化=物象化されているのかを明らかにするとともに、その暴力的なまなざしがかつての日本軍による暴力と表裏一体であることを明らかにした。

韓国を代表する慰安婦小説として世界的に知られている作品がいかに女性嫌悪に満ち、慰安婦をめぐる物語を大きな物語へ回収していったのか、そしてそれがいかに傷ついた男たちを癒し、男性性の再獲得=再男性化に繋がっているのかを析出した。

慰安婦関連ドキュメンタリーやアニメーションにおける少女の神格化に注目し、表象の暴力性と記憶の政治のあり方を批判的に問い、その政治的無意識を特に被害者意識に彩られたナショナリズムから明らかにした。

東アジアの慰安婦映画における慰安婦表象の共通点と相違点を明らかにしながら、それがそれぞれの集合的記憶としてどのように想起され、再生産されているのか、そこにどういった特徴があるのかを分析した。

韓国の日本軍慰安婦に際立つ特権性(例えば、少女=処女や東南アジアの慰安婦らに対する優位性など)を、他者の他者化という内在された植民地主義的なまなざしから問い直し、その自己矛盾がどのような意味を持ち、どういった役割を果たしているのかを浮き彫りにした。

こうした研究成果は論文として公開するだけでなく、日本と韓国でそれぞれ自主研究会や座談会を開き、関連研究者や一般市民らと共有するように努めた。ただ研究最終年の年度末に予定していた映画上映・討論会及び研究会が新型コロナウイルス感染拡大により、中止を余儀なくさ

れたことは非常に残念だったが、これまでの成果を新たな研究課題に繋げることができたので、研究のさらなる発展、深化が期待されている。また分析途中のものについては結果がまとめ次第、公開を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 李惠慶	4. 巻 第16号
2. 論文標題 慰安婦映画『黎明之眼』を読む 慰安婦問題をめぐるテキストの政治的無意識とプロパガンダの彼方へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 「アジア太平洋研究センター年報」	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李惠慶	4. 巻 第14号
2. 論文標題 慰安婦小説『母・従軍慰安婦』の一考察 ジェンダー表象の政治学と脆弱な男たちの「戦い」の後で	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『アジア太平洋レビュー』	6. 最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 李惠慶	4. 巻 No.130
2. 論文標題 散種する<死>、輻輳する<欲望> 映画『かあさんは朝鮮ビーだった』における断罪のポリティック スと表象の暴力	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『比較文化研究』	6. 最初と最後の頁 199-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李惠慶	4. 巻 第15号
2. 論文標題 慰安婦物語と記憶のポリティックス 短編アニメーション『少女の話』と『少女に』を例に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『アジア太平洋研究センター年報2017-2018』	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 李惠慶
2. 発表標題 散種する<死>、輻輳する<記憶> 小説『かあさんは朝鮮ピーだった』から映画『かあさんは朝鮮ピーだった』へ
3. 学会等名 テキスト研究学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

慰安婦映画『黎明之眼』を読む 慰安婦問題をめぐるテキストの政治的無意識とプロパガンダの彼方へ http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia-pacific/publication.html 慰安婦小説『母・従軍慰安婦』の一考察 ジェンダー表象の政治学と脆弱な男子の「戦い」の後で http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia-pacific/pdf/review_2017-04.pdf 慰安婦物語における記憶のポリティクス 短編アニメーション『少女の話』と『少女に』を例に http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia-pacific/pdf/publication_2018-06.pdf
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考